

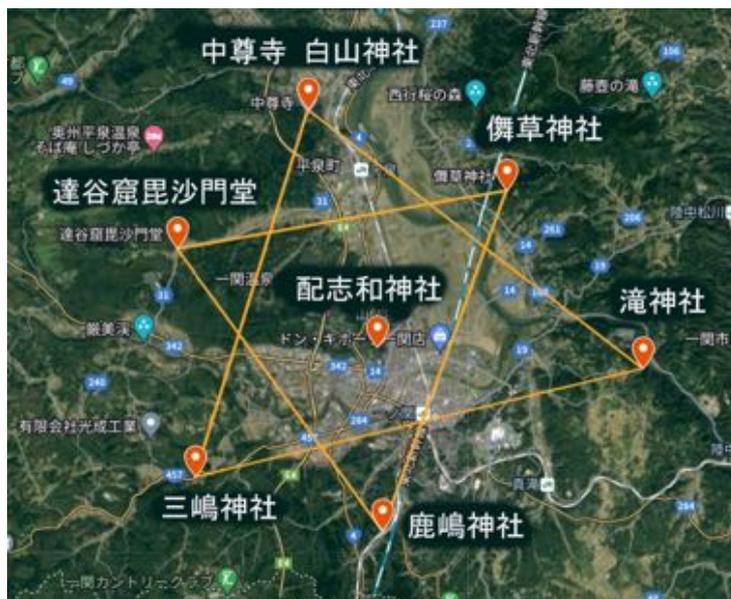
坂上田村麻呂の魔法陣

●菅原道真と平将門を調べたので、次は安倍晴明だと思い、晴明の関わる神社を探そうと検索したら、「岩手の六芒星」があることがわかったので、ちょっと開いてみた。

すると、

「六芒星は一関の郷土信仰研究家が提唱したもので、安倍氏が朝廷軍に対抗するため、6神社の巨石を通じて結界をはったものとされています。平泉金鶏山白山神社（創建：850年）・巖谷窟毘沙門堂（創建：801年）・観音山舞草神社（創建：718年）・萩荘三嶋神社（創建：801年）・滝神社（本宮の創建：807年）・旧鬼死骸村鬼の手の鹿嶋神社（創建：800年代?）そしてその中央には東北で一番古いとされる配志和神社（創建：110年）が鎮座し、この六芒星を存在感のあるものとしています」とある。

以前、近畿の五芒星を調べたことがあったが、まったくピンポイントになっておらず、本当の祭祀線はピンポイントで繋がれていることを隠すためのスピンだと書いたことがあった。岩手六芒星もきっとそれに感化された人がアバウトに結びつけたのだろうと推測できたが、六芒星なのでもしかしたら二等辺三角形が二つ重なっているのはあり得るかもしれない、それに確かにどの神社も古い…と思い、ざっと調べてみた。すると、



●やはり、まったくアバウトな三角形だった。二等辺三角形には、一つは 500m 誤差、もう一つは 1km も差があって祭祀線としてまったく成り立たない。正確なコンパス地図を使わなくても Google マップのライン機能で簡単にわかった。祭祀線はピンポイントでつながらないと成り立たない。私の基準は差 10m 内。最低でも境内内である。この六芒星は機能していない。

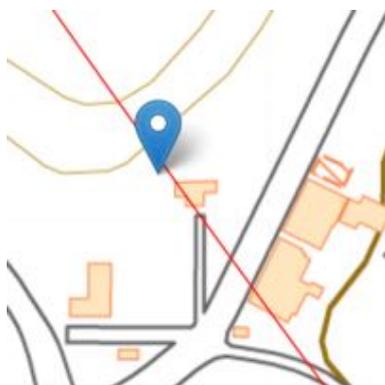
●ただ、古い神社でもあり、蝦夷がやられた歴史ある場所でもあるのでこの場所の本当の祭祀線を調べてみることにした。

配志和神社

●まずは似非六芒星の中心にある最も古い神社の配志和神社との二等辺三角形になる神社を目測で探した。すると、六芒星の神社だけでは、下記の二つの祭祀線が見つかった。



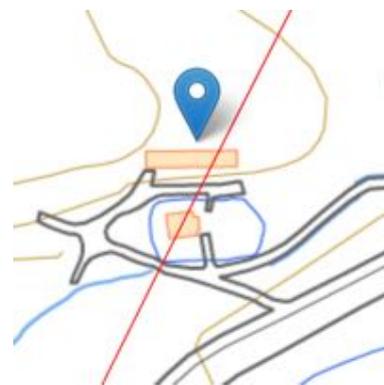
■ 達谷窟毘沙門堂 →→ 6.247km →→→ 配志和神社 ←←← 6.247km ←←← 三嶋神社



三嶋神社



配志和神社



達谷窟毘沙門堂 + 弁才堂

■配志和神社

延喜式神名帳にも記載されており、創立は古く今から千九百年前人皇十二代景行天皇のとき皇子日本武尊詔を奉じて軍を率い遠く道の奥に入り蝦夷の地にいたる。進んで営を此の地、中津郷の山要峰に移し（神社地内）その嶺頂に登り賊を平治せんことを祈り自ら矛を収め三神を鎮斎し東奥鎮護の神として祠を建て、火石輪と称した。今の配志和神社である。当初、磐座山に鎮座していたが、中古、現在地に遷座したといわれ、磐座山を本山・奥の院と呼び、現在地を新山という。

祭神/高皇産靈神 瓊瓊杵尊 木花開耶姫命

一関市山目字館 5 6

■三嶋神社

人皇五十代桓武天皇延暦二十年（801）、**坂上田村麻呂**将軍蝦夷征伐のため東北地方に参向の折、社を建て伊豆の三嶋大社に準じて神号を三嶋神社としてお参りした。天承(1131)の頃兵火に罹り殿堂・縁起その他重宝共に焼滅、僅かに石堂のみ残る。陸奥出羽押領使藤原清衡の崇敬厚く、その子基衡堂宇を寄進、秀衡祖意を継いで奉幣した。田村右京大夫坂上建頭歴代の藩主の崇敬最も厚かった。

御祭神/大山祇命 保食神 宇迦之御魂神 一関市萩荘字大桑213番地

■達谷窟毘沙門堂

およそ千二百年の昔、悪路王・赤頭・高丸等の蝦夷がこの窟に塞を構え、良民を苦しめ女子供を拐さらう等乱暴な振舞が多く、国府もこれを抑える事が出来なくなった。そこで人皇五十代桓武天皇は、**坂上田村麿公**を征夷大將軍に蝦夷征伐の勅を下された。対する悪路王等は達谷窟より三千余の賊徒を率い駿河国清見関まで進んだが、大將軍が京を発するとの報を聞くと、武威を恐れ窟に引き返し守を固めた。延暦廿年（八〇一年）大將軍は窟に籠る蝦夷を激戦の末打ち破り、悪路王・赤頭・高丸の首を刎ね、遂に蝦夷を平定した。

大將軍は、戦勝は毘沙門様の御加護と感じ、その御礼に京の清水の舞台を模して九間四面の精舎を建て、百八体の毘沙門天を祀り、鎮護国家の祈願所とし、窟毘沙門堂（別名を窟堂）と名付けた。翌延暦廿一年（八〇二年）には別當寺として達谷西光寺を創建し、奥真上人を開基として東西三十余里、南北二十余里の広大な寺領を定めた。降って前九年後三年の役の折には源頼義公・義家公が戦勝祈願のため寺領を寄進。奥州藤原氏初代清衡公・二代基衡公は七堂伽藍を建立したと伝えられる。文治五年（一一八九年）源頼朝公が奥州合戦の帰路、毘沙門堂に参詣され、その模様が「吾妻鏡」に記されている。

岩手県西磐井郡平泉町平泉北沢16

●蝦夷（東北人・出雲族）討伐にやってきた日本武尊ヤマトタケルが作った配志和神社を、蝦夷討伐に来た征夷大將軍坂上田村麻呂が利用した祭祀線だった。達谷窟は、元々は出雲族の聖地。東北人として気持ちのいい祭祀線ではない。

■舞草神社 →→ 5.727km →→→ 配志和神社 ←←← 5.727km ←←← 観音山山頂（三角点）

■舞草神社

この神社は仁壽二年八月従五位の下を授けられ陸奥百座・磐井二座の中的一座で 延暦年間**坂上田村麿**東征の砌りこの社殿に聖観音を勧請、当時「きば寺」と呼ばれていた。佛教が盛んになるに伴い僧房も漸増し、平泉全盛のころは二十四院を数え観音堂を囲んで散在するに至ったと言われ、羽場の観音とも称せられていた。この吉祥山東城寺は奥州三十三番のうち二十七番札所として栄えたが、明治四年非佛棄却に逢い神社として復興し同年十月郷社に定められ明治八年村社に定められた。大正二年十一月熊野神社を合祀し今日に至っている。一関市舞川町字舞草太平5



●こちら坂上田村麻呂。観音山山頂はピラミッドであり神社は祭祀場。舞草神社がここに建てられた理由は、観音山頂上と配志和神社と同距離になる場所を選んだということ。大きなお寺に五重塔を建てるのも同じ理由。配志和神社に集まった気を引き寄せている。あるいは配志和神社に観音山の神気を送り出している。山が御神体の出雲族の祭祀場に田村麻呂が観音様を持ち込んだということ。

●配志和神社が気になってきたので、近くに高い山がないか探してみた。すると栗駒山があった。



■配志和神社 →→ 29.006km →→ 駒形根神社嶽宮 栗駒山頂 ←← 29.006km ←← 白山神社



■駒形根神社嶽宮（奥宮）

古来、日宮・大日社・駒形社と称し、俗にお駒様と親しまれている。社記に『日本武尊御東征の折、大日靈尊外五柱の主神に祈願創建』奥羽鎮護の一ノ宮として駒形嶽（栗駒山の古名）を奥宮、沼倉の地に里宮を祀ったと誌され、太古より日宮と呼称。日は火に通じ火山を意味し、私達の祖先が山のもつ神秘性と靈威に感動する姿が偲ばれ、山岳信仰を母胎に自然崇拜・鎮魂の祭礼が起こり、神社を形成してきた。大和朝廷の蝦夷平定に伴い社勢隆盛。延暦 20 年（801）坂上田村麿奥羽鎮定を祈願。四大門（東は一関三島・西

は花山・南は尾松大鳥・北は秋田仙北)を建て、自ら駒形根大明神の大額奉献。次いで仁寿元年(851)神階正五位贈、清和天皇貞観元年(859)勅使下向正一位贈称号賜勅宣日宮が史料に散見し、延喜式(901~)神名帳登載。後、源氏、平泉藤原氏崇敬篤く武具祭田献納。社殿壮大。四大宮司三十禰宜六十社家を容し、奥羽総鎮守として信仰を集め(親蹟聞老志)、お駒精進講・お駒講・駒形講等の駒形信仰の源流となった。嘉祥3年(850)駒形山大昼寺建立。やがて奥羽一帯修験の地となり神仏混淆に入る。889年後の元文4年(1739)仏教から分離、御巡幸始まる。寛保3年(1743)桜町天皇より御宣命と御宸筆の扁額を賜る。明治4年郷社に列する。

祭神/大日靈尊、天常立尊、吾勝尊、國常立尊、天津彦番邇々藝尊、神日本磐余彦火々出見尊

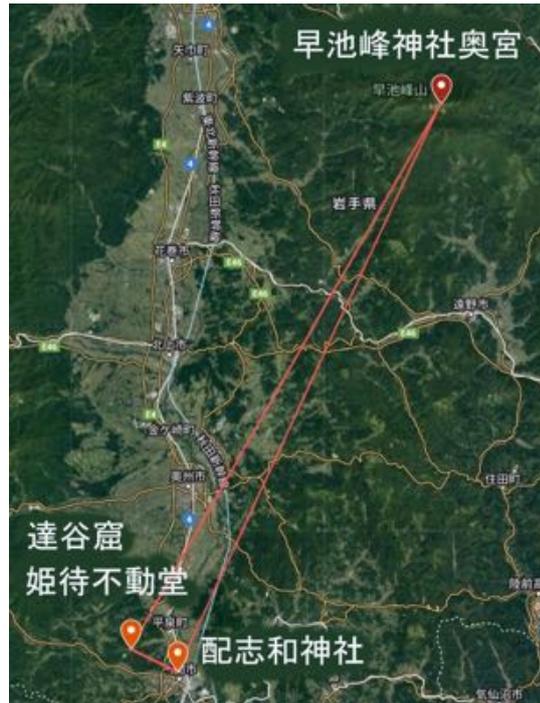
■白山神社

奈良時代神亀元年(724)の創祀と云われ、後桓武天皇の延暦10年(791)征夷副使坂上田村麿下降の砌り、本社前に屯営して勝利を祈り、社内に観音堂を営み、これより三迫総鎮守となる。又、後鳥羽天皇の文治5年(1189、鎌倉)閏4月28日源頼朝藤原泰衡征伐の途次本社に参詣し、建久元年(1190、鎌倉)9月征伐了え同月13日報賽の祭事あり、この祭事は今尚古式に依って伝え行われている。明治7年村社に列格。白山社内に観音堂ありて大同年中田村將軍の創建にかかり奥州七処の一で護国の鎮守としたという。又、永承3年(1048、平安)建てたという仁王門の趾がある。鈴鹿の森には古昔神明宮があり、花田池、龍蔵池、五色池、闕伽池などの遺跡があつて古社のおもかげをとどめている。(観聞志、名跡志、封内記)。祭神/菊理比咩神、伊邪那岐神、伊邪那美神

宮城県栗原市金成小迫山神77

●またまた坂上田村麻呂の祭祀線。配志和神社に神気を集めて中心の祭祀場に行っているのがわかる。星の数もある白山神社だったので、期待しないで由緒を確かめたが古かった。泰澄が白山に十一面観音を祀ったのが717年である。創建はたった7年後の724年。どうして東北にこんなに古い白山神社が置かれたのか。年表を確認すると、724年は陸奥守大野東人が多賀城を築城し本格的な陸奥支配が始まった年である。多賀城の護りとして配置されたのだろうか。改めて調べ直してみようと思う。六芒星調べのつもりが、すっかり大和朝廷の蝦夷討伐調べになってしまった。

●次は岩手といえば早池峰山である。田村麻呂は瀬織津姫ともめざとく繋げているのだろうか…



■達谷窟毘沙門堂（姫待不動堂） →→ 75.414km →→ 早池峰神社奥宮 ←← 75.414km ←← 配志和神社

■達谷窟毘沙門堂 姫待不動堂

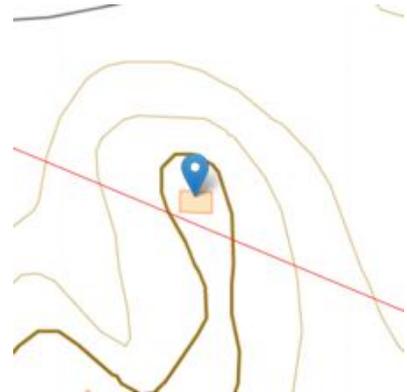
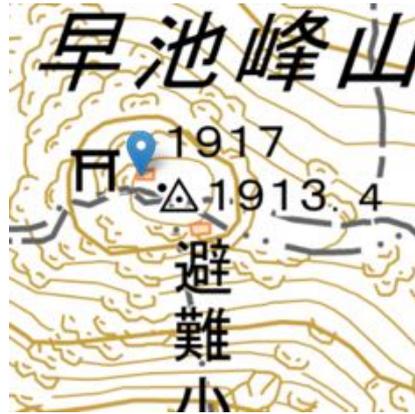
悪路王等は京から拐って来た姫君を窟上流の「籠姫」に閉じ込め、「櫻野」で暫々花見を楽しんだ。逃げようとする姫君を待ち伏せした瀧を人々は「姫待瀧」、再び逃げ出せぬよう姫君の黒髪を見せしめに切り、その髪を掛けた石を「髻石」と呼んだ。姫待不動は智證大師が達谷西光寺の飛地境内である姫待瀧の本尊として祀ったものを、藤原基衡公が再建した。しかし年月を経て堂宇の腐朽が著しい為、寛政元年（一七八九年）當地に移された。桂材の一木彫で、全国でも希なる大師様不動の大像である。制作年代は平安後期で、岩手有形文化財に指定されている。岩手県西磐井郡平泉町平泉北沢16

●達谷窟毘沙門堂にまた繋がった。姫待不動堂というまさに悪路王討伐に関わる不動明王である。しかし、少し下流の姫待滝にあったとされる。とはいえ達谷窟の境内であり、毘沙門堂と金堂の間に位置するので可とした。おそらく分かっていて不動堂をより正確な場所に移したと考えられる。

●次は早池峰山と栗駒山とのつながりがあると推測した。



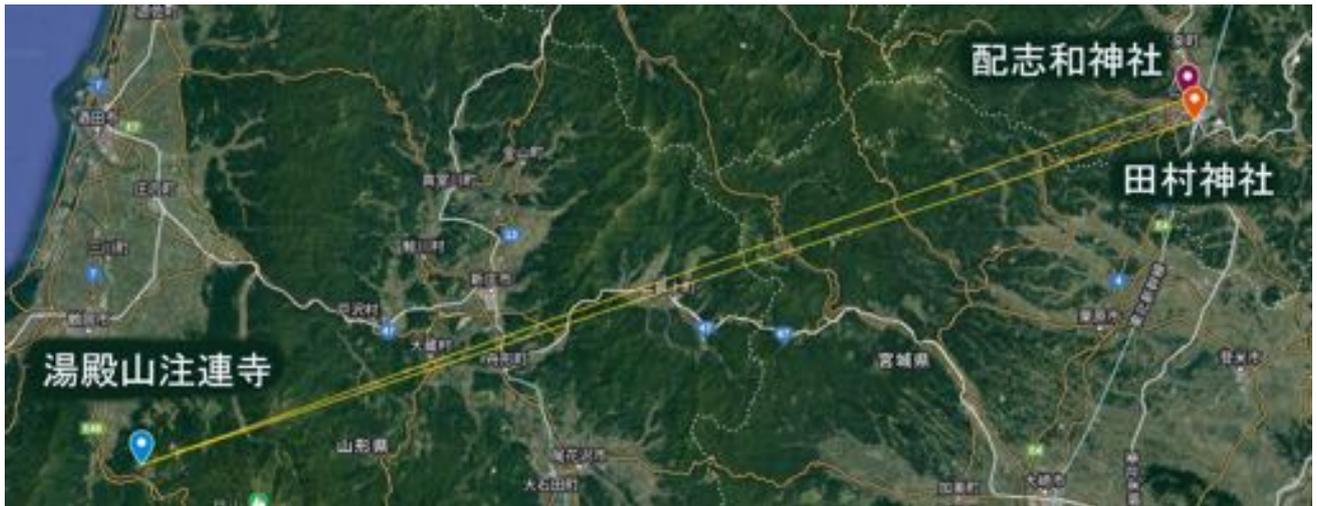
■栗駒山山頂 →→ 89.705km →→ 早池峰神社奥宮 ←← 89.705km ←← 金田八幡神社



■金田八幡神社

平城天皇の大同2年(西暦807年) 坂上田村麻呂が再び奥州に下向し、ここに金神金山彦神を祀った。これが、八幡宮の地主神である。(太田南畝「一話一言」所収、金田八幡記録)。冷泉天応天喜4年(西暦1056年)8月、陸奥守兼鎮守府將軍源頼義が金田城の鬼門鎮護のため勸請したと伝えられ、金田荘の総鎮守として崇敬された。その後寛治(西暦1087年)の頃藤原清衡がこれを再興したと伝えられる。当社の社家は日枝神社と同様に、従五位下清原業隆でその子孫十二代を経て紀伊守祐隆が天授2年(西暦1376年)羽黒派修験道に入り紀伊守宥義と称し、その四世から清浄院と改め代々別当をつとめた。明治10年(西暦1877年)3月村社に列せられた。宮城県栗原市金成館下122

●やはりあった。ただ、アテルイが処刑されたのは802年。金神を祀ったのは807年。その後の護りとして出雲族の自然聖地である栗駒山と早池峰山二つの神気を戦いの神と繋げる祭祀線作りをしているようだ。



■ 配志和神社 →→ 113.761km →→ 湯殿山注蓮寺 ←← 113.761km ←← 田村神社



■ 湯殿山注蓮寺

この寺は、833年（天長13年）空海（弘法大師）の開山と伝えられ、湯殿山派4ヶ寺の中で最も新しい。出羽三山神社では出羽三山（羽黒山、月山、湯殿山）の開祖を蜂子皇子（能除大師）としているが、注連寺や大日坊では湯殿山の開祖を空海とし、湯殿山と高野山を「空海によって定められ清められた、対となる聖地」としている。

天正9年（1581年）から天正10年（1582年）にかけて最上義光は新庄を中心に大宝寺氏（武藤氏）と争っていた。その最中、前森氏（東禅寺義長・東禅寺勝正）が謀反を起こし[2]、武藤義氏の居城尾浦城（現・山形県鶴岡市大山）を取り囲む。寒河江荘に拠って義光と敵対していた寒河江高基は自ら六十里越を通り、縁戚関係にあった義氏の救援に向かうが、到着前に尾浦城は落ち、義氏は自害してしまう。その際、大綱注連寺より三千仏の画像三幅対を持ち帰り、慈恩寺弥勒堂に寄進している。

出羽三山の参道のうち七五三掛口に位置し、注連寺から先が結界とされていたため、出羽三山が女人禁制の時代は「女人のための湯殿山参詣所」として信仰を集め、大いに賑わった。江戸時代初期には羽黒山の別当だった天宥（1592年-1674年）によって天台宗への改宗が図られたが、湯殿山派4ヶ寺が結束して幕府に訴え、湯殿真言を守った経緯がある。鉄門海上人（後述）らの功德もあり1867年（慶応3年）

には北海道函館に注連寺の出張所（現在の新注連寺）を開くなど、東国にまで広く知られるに至った。しかし、明治の神仏分離に伴い湯殿山を含む出羽三山がいずれも神社となると、湯殿山参詣所としての注連寺の役割は急速に失われ、寺は勿論のこと周辺の宿坊も次第に廃れ、住職も去り“破れ寺”への道を歩んだ。 山形県鶴岡市大綱字中台 92-1

■田村神社

延暦年間（782年 - 806年）に**坂上田村麻呂**が東夷平定の際に館山に陣営を敷き、諏訪大社に勝利を祈願したのが始まりとされる。

康平4年（1061年）に前九年の役で安倍貞任を征伐する源頼義・義家父子が田村麻呂と同じく館山に陣を敷き、合戦の祈願のために奉幣使として中原大夫清房を伊勢神宮や石清水八幡宮へと遣わしたところ、両宮の大御神の御神託を賜って、この地の八方に八幡宮を勧請した。その第一社が現在の当社である。

元禄7年（1694年）に一関藩へと赴任した初代田村藩主田村建顕が、この地に田村麻呂を慕う人々が多いことから代拝参宮として伊勢へ伊藤惣助を遣わした際に、滋賀県甲賀市の田村神社の御分霊を田村神社として当社の相殿へと併せ祀った。以来田村氏の崇敬神社となり、一関の総鎮守とされた。

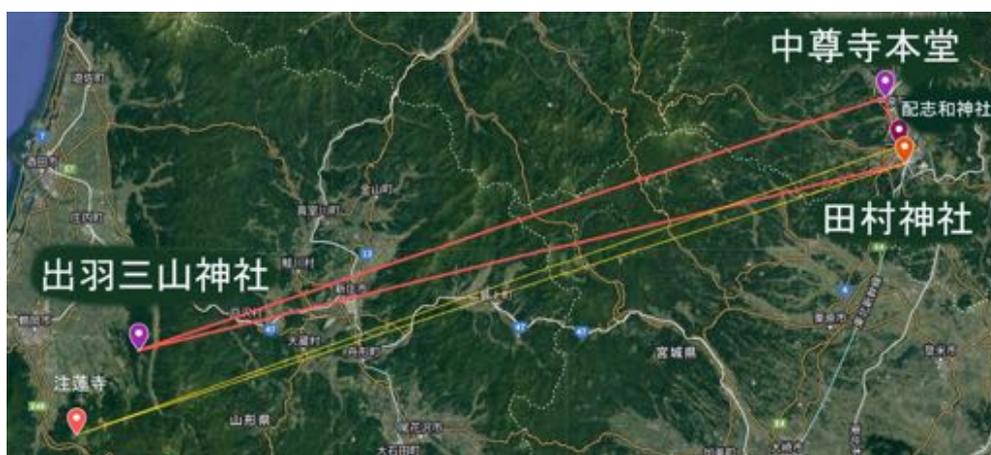
岩手県一関市釣山 19

●田村神社について

田村麻呂が亡くなった弘仁2年（811年）の翌年、弘仁3年（812年）に、嵯峨天皇の勅によって坂上田村麻呂をまつる祭壇が鈴鹿峠の二子の峰に設けられた。そして同年、この近辺で疫病が発生したために嵯峨天皇の勅命によって当社で厄除の大祈祷が行われた。これにより、当社は厄除の神として崇敬されるようになった。

●田村麻呂が陣営を敷き諏訪大社に勝利を祈願した場所に田村麻呂を祀る神社を見つけたので、配志和神社との繋がりを探してみた。なんと、度々訪ねたことのある湯殿山注連寺と繋がって驚いた。ただ、田村麻呂が生きていた時代にまだ注連寺はなかった。注連寺の創建は22年後の833年。おそらく出雲族末裔の安倍家討伐の際に源頼義、義家親子が八幡宮を建てた時の祭祀線だと思われる。

田村麻呂が生きていた時代に繋がれるなら出羽三山神社だろうと思い探してみた。



■石井神社 →→ 111.218km →→浮嶋稲荷神社←← 111.218km ←← 配志和神社

■石井神社

元石塚村と称し一村独立の居村であった。同村草創以来当社を産土神社として崇敬す。昭和 18 年 3 月 24 日村社に列格す。祭神/天之忍穗耳命、天津彦火瓊々杵命 稲倉魂命
横手市雄物川町会塚字石塚 179

■浮嶋稲荷神社・大沼浮島

湖畔にある大沼浮嶋稲荷神社（祭神/宇迦之御魂神）の神池とされ狐の形をしている。沼には大小の葦の島が風や流れに関係なく浮遊し、江戸時代には国の数 32 あり、その動きで吉凶を占っていたとされる。沼は白竜湖とも呼ばれ弁財天が祀られている。大円寺『朝日嶽縁起』（1505 年）によると、朝日岳の麓に御手洗の「大富沼」があると記されている。

白鳳 9 年（681）役の小角（役の証覚・役の行者）が弟子の覚道を連れて出羽路に来た折、大谷川（朝日町大谷）のほとりで梵字が記された板碑が流れくるのを見つけ、川をさかのぼり、60 余りの島が浮遊する神池大沼を見つけた。湖畔に浮島稲荷大明神を祀り、弟子覚道を別当（大行院）とし朝日岳修験が行なわれた。建久 4 年（1193）には寒河江荘地頭となった大江広元の進言により源頼朝の祈願所になり、その後も大江家、徳川家、最上家にも祈願所として崇敬された。国指定名勝。



写真/自由に動く浮島（手前）と動かない出島（奥） 山形県西村山郡朝日町大沼

●浮島は、現在は数も減り、岸に付き動かないことが多いが、動く時は流れや風に関係なく意志があるかのように動き回り驚く。しかも波を立てずに動く。役の小角は梵字が書かれた板碑が流れてきたのを見つけたのだから、すでに大沼は異教徒の浮島信仰の地だったはず。「大富沼」が大沼なら出雲系「富一族」の祀る沼だったのだろう。大沼を拠点にしていた朝日嶽修験の大朝日岳にも大富観音が祀られていた。役の小角が稲荷神を祀ったとすれば伏見稲荷よりも古くなる。調べると 730 年に「大沼社を南西の丘に移す」記述があるので、その時に元々の弁財天や龍神（瀬織津姫系）を稲荷神にすり替えたのかもしれない。とはいえ、近頃は宇迦之御魂神も瀬織津姫だったという考え方が浮上しているから隠して祀っていたことになるのだろうか。いずれにせよ、古いしくみはほとんどが稲荷神社ではなく大沼の鳥居の立つ「出島」（写真）が起点となっている。弁財天（瀬織津姫）を祭神とする大沼浮島社（仮称）はここにあったはず。

大沼浮島は、全国に散らばる浮島神社の総本宮ではないか。そして、多くの神社の神池に浮島のごとく島が作られ弁財天や市杵島姫（瀬織津姫）が祀られているのも本来はこの分社だったのではないだろうか。池に囲まれた古墳すらも浮島に見えてくる。古代史を探る時、きっと浮島信仰は重要な鍵になると思われる。

●横手の石井神社と繋がったが、創建不詳。ただ、集落を写真で見ると、まるで島。水田に水を入れた時の様子を見てみたい。おそらくこの島全体が石の塚だったから石塚というのではないだろうか。石塚村の石井神社だから、きっと出雲族の聖地だったはず。信憑性を得るために石井神社と配志和神社の同距離に他の神社がないか調べてみた。すると、

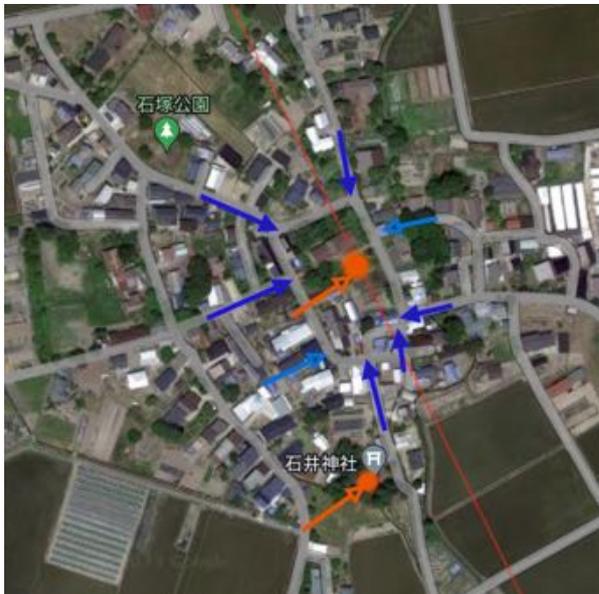


■石井神社 →→ 69.531km →→館森神社←← 69.467km ←← 配志和神社

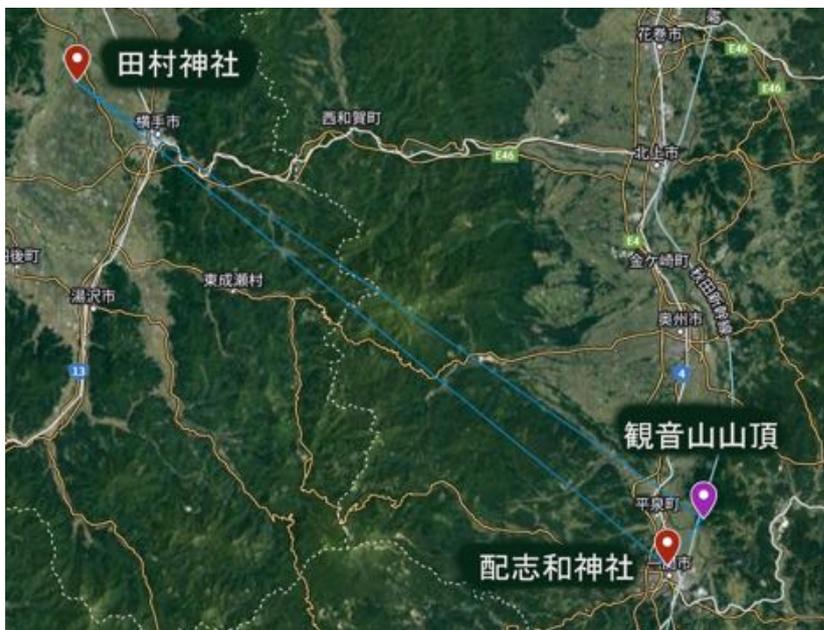
■館森神社

坂上田村麻呂が斯波城の支城を当所に築き、鎮守の神として鹿島・香取の神を勧請したのが本社の創祀なり。万延元年（1860）九月七日、再建の棟札に古館大明神宝殿一字成就とあり、また古来の口伝に斯波氏京都の明輪観世音を奉崇し、当所に勧請したものにして千住観世音と称されていた。
岩手県紫波郡紫波町犬吠森沼端

●実は石井神社から 60m もずれている。通常なら即 NG なのだが、ここは捨て難い。理由は、正三角形に近い二等辺三角形は、「達谷窟毘沙門堂→→配志和神社←←三嶋神社」の祭祀線や、宮城県の大嶽丸封印にも田村麻呂は使っている。そしてここは、やはり不思議な場所に思えるからだ。下の写真を見ていただきたい。集落の真ん中の四角いエリアに向かって 6 本の道が向かっている。道らしきものも含めると 8 本になる。四角の中には名主らしき大きな家がある。それにしてもなんでこんなに道が真ん中に向かっているのか？ 通常ならこんな場所に必ず神社は存在する。石井神社の元の場所だろうか。奥の院だったのか。あるいは石でできた塚の中心だったのだろうか。この石塚地区からは縄文遺跡が発掘されている。縄文時代ここは何の場所だったのだろうか。なにかエネルギースポット的な場所なのではないだろうか。坂上田村麻呂の時代にしても 1200 年も前のことなので、神社が移動したことはあり得る。秋田に行ったときは絶対に現地検証しようと思う。というわけで、私のルールでは NG だけれど限りなくグレイに思えるので記録しておくことにした。



●横手を調べていたら、なんと近くに田村神社があることがわかった。しかも、後に祀られたのではなく、田村麻呂が毘沙門天を祀ったのが始まりとされる。残念ながら石井神社とのつながりは探せなかった。そこで配志和神社と繋がっているか調べてみた。すると…



■ 観音山山頂 →→ 71.451km →→ 田村神社←← 71.451km ←← 配志和神社

要望による寄付金で拝殿が建築された。なお、当社のすぐ右前方には安倍館があり、安倍氏は当社を守護神（荒覇吐神）として尊崇し、磐井以南に威を振る拠点をこの地に形成したと伝えられる。

祭神 / 荒覇吐神 伊邪那岐命 石凝姥命 日本武尊

岩手県奥州市衣川区石神 99

■道祖神社

創建年代は不詳であるが、この神社の鎮座地は江戸時代の栃木村に、明治八年（1875）以降の満倉村に、明治二十二年（1889）以降の佐倉河村にそれぞれ該当する。

栃木村風土記御用書出には「一村鎮守 一小名妻ノ神」のほか社地・社・鳥居・地主・別当・祭日などの型通りの記載しかない。

この神社は栃木村境の街道沿いに「さいの神（塞の神）」として村内へ邪霊が侵入するのを防ぎ、道行く人を災難から守護し、村内の災難、争いを防ぐ神とし、また夫婦和合の神として祀られた。安永年間（1772-1781）には、すでに村鎮守として崇敬され、明治四年（1871）に村社に列した。

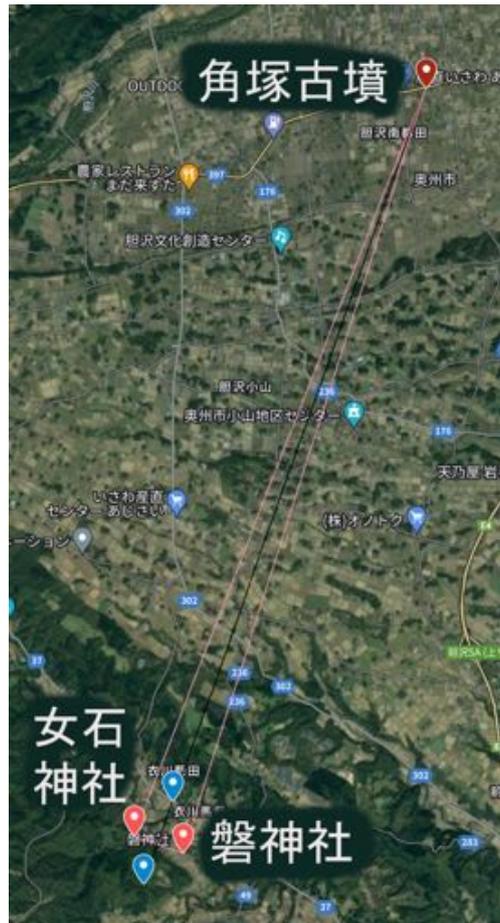
御祭神/八衢彦大神（やちまたひこのおおかみ）八衢比賣大神（やちまたひめのおおかみ）

●おそらく、出雲の聖地二つとつながる場所に配志和神社を置いた始まりの祭祀線だと思う。磐神社には出雲族の女神荒覇吐神（瀬織津姫）の磐座が祀られ、道祖神社には八衢彦大神夫婦が祀られている。八衢彦大神は出雲族の最高神クナト神の息子の猿田彦神のことである。磐神社の由緒に、この神社は男石大明神とも称し、松山寺境内の女石神社と合せた陰陽の二神という記述があった。出雲族は夫婦神（陰陽）で祀るのが基本である。

●女石神社が気になったので同距離ラインを割り出してみた。まず、円を描ける地図を使って円をクロスさせ、2点がクロスしたポイントを、グーグルのマイマップにチェックし、ラインを繋ぎ前後に同距離ラインを伸ばす。小学生の時、コンパスを回すのは楽しかったことを思い出す。算数は大嫌いだったが簡単に円を描けるのが面白かった。

すると…





■女石神社 →→ 17.951km →→角塚古墳←← 17.951km ←← 磐神社

■女石神社

創建時期は不詳。磐神社の由緒書を見る限り元は二社で一社という扱いで、後に二社に分かれたようです。よって当社も延喜式神名帳にみえる「陸奥国膽澤郡 磐神社」(の片割れ)とみていいのかもしれませんが。祭神/女石大神 稲葉姫命 伊邪那岐命 岩手県奥州市衣川区女石 50

■角塚古墳

角塚古墳は日本最北端の前方後円墳であり、しかも近隣の古墳よりもたった一つだけ1～2世紀ほど古く、さらに前方後円墳としては岩手県に唯一の存在となっており(最も近い前方後円墳とは70kmほど離れている)、その特異な存在で国の史跡に指定されている。古墳の年代は、5世紀から6世紀初めと推定。それ故か、この古墳には古くからの伝承が残されており、角塚という名もそれに由来している。

昔、この地に高山掃部という、50近い蔵を持つ長者が住んでいた。長者は人の良い人物であったが、その奥方は、使用人を朝から晩までこき使うような強欲で意地の悪い性格であった。

ある年、悪天候のために米が取れず餓死者が出るほどとなり、村人は長者に助けを求めた。快く長者は蔵を開放して米を施したのだが、それを見て奥方が怒り出した。そこで口汚く喚き散らし悪態を吐きす

ぎたため奥方は喉の渴きを覚え、井戸の水を飲み干さんばかりに飲んだ。そして水面に映った自分の顔をふと見ると、あろうことか口が耳まで裂けて、頭に角を生やした大蛇の姿になってしまっていた。錯乱した奥方は散々に暴れて屋敷を壊すと、向かいにあった止々井沼に姿を隠し、その沼の主となったのである。

それ以降、奥方が化身した大蛇は里に現れて家畜や人を襲って喰らった。村人が困り果てていると、大蛇は8月15日に15才の生娘を生け贄に差し出すように要求してきた。やむなく村人は、松浦の国から小夜という名の娘を買い、生け贄と決めたのである。

8月15日になり、小夜は化粧坂の湧き水で身を清め、自らの念持仏を髪の中に隠し持ち、止々井沼のほとりで大蛇を待った。やがて雲行きが怪しくなり嵐となると、大蛇が姿を現した。小夜は怖れずひたすら経を読み、そして襲いかかる大蛇に向かって経文を投げつけたのである。経文が大蛇に当たると、突然頭に生えた角が抜け落ち、大蛇の姿は、みるみる元の長者の奥方に戻ったという。そしてこの抜け落ちた角を埋めたのが角塚古墳であると伝えられている。

生け贄とならずに済んだ小夜は、念持仏を化粧坂に残しそこの湧き水を携え、再び松浦の国へと帰った。そして故郷に着くと、盲目の母の目に湧き水をつけるとたちまち目が見えるようになったという。

現在でも南都田には化粧坂という地名が残っており、そこにある久須志神社の境内に薬師堂がある。この薬師堂に安置されているのが、小夜の念持仏と伝えられている。慶安年間（1648～1651年）の頃に、修験者の宝性院明盛という者が夢告を受け、薬師堂跡から薬師如来像を掘り当て、この地に薬師堂を再興したとされる。像の大きさは一寸八分、33年に一度開帳され、小夜の伝説に従い眼病に効験があると言われる。岩手県奥州市胆沢区南都田塚田

●出雲族の豪族の墓だと思われる。小夜の伝説は日本各地にあるらしい。竜蛇族である出雲族を悪く思わせるための物語だと思う。東北には悪者の竜や蛇を成敗する話はあちこちにある。

●岩手の古い神社を探していたら東和町の丹内山神社にアラハバキ大神の巨石があることがわかった。田村麻呂は、出雲族の磐座を利用しているのだから繋がっているはず。すると、石巻の鹿島神社とつながった。

■配志和神社 →→ 46.934km →→ 丹内山神社
←← 46.934km ←← 鹿島神社



■丹内山神社

社は、当地開拓の祖神である多邇知比古神（たにちひこかみ）を祀る。土着の信仰を起源にすると思われ、本殿の背後に「アラハバキ神」の磐座とされる巨岩が祀られており、神社創立より古い信仰の存在をうかがわせる。延暦二十年（801）には、坂上田村麻呂が戦勝祈願に立ち寄ったと伝える。

承和年間（834-847）、空海の弟子の日弘が当地に至り、不動尊を安置して「大聖寺不動丹内大権現」と称した。その後「大聖寺種内権現」と改称したという。以来、神仏混淆の霊場として繁栄した。

康平五年（1062）には、源頼義・義家が安倍貞任追討の際に祈願し、追討後に義家が八幡神社を、弟の義綱が加茂神社を建立したという（今、境内に二社がある）。

藤原清衡（1056-1128）の崇敬が篤く、計 108 の堂宇と仏像を寄進したとされるが、今は残らない。

当社は一時期衰微したが、藩主の南部利敬（としたか、1782-1820）が文化七年（1810）に再興した。現在の本殿はその時の建築である。

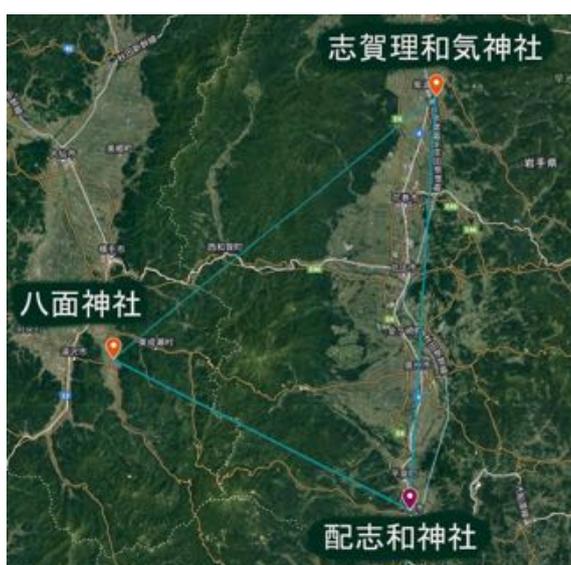
明治の廃仏毀釈をうけて当社は仏教色を排して現在の社号に改称し、仏像は安俵（あひょう）の凌雲寺に遷された。現在の祭神は、多邇知比古神のほか、天之御中主神、高御産日神、神御産日神、宇麻阿志訶備比古遲神、天之常立神八十八座である。 岩手県花巻市東和町谷内 2-303

■鹿島神社（神取山）

祭神/武甕槌神 創祀年月日不明。明治 5 年 3 月村社加列。桃生町神取

●出雲族のアラハバキ女神と、石巻涌谷の黄金祭祀線を作る鹿島神社とつながった。神取山は香取だと思うのになぜか鹿島神社があるので印象に残っている神社である。鹿島神社の詳細は不明だが、大切なポイントにあるので古い神社にちがいない。すぐ近くには田村麻呂が木船明神を勧請した和瀨神社もある。詳しくは奈良時代のカテゴリーを開いてご覧いただきたい。

●日本最北の式内社 志賀理和気神社を見つけたので調べてみた。



■配志和神社 →→ 67.415km →→ 志賀理和気神社←← 67.415km ←← 八面神社

■志賀理和氣神社

志賀理和氣神社は、岩手県紫波郡紫波町桜町にある神社。式内社で、旧社格は県社。別称として「赤石神社」「浮島明神」とも。式内社としては最も北に位置することで知られる。社伝では、延暦23年(804年)に**坂上田村麻呂**が、東北開拓守護神として経津主命(香取神)・武甕槌命(鹿島神)を勧請したことに始まるという。

9世紀初頭において、一帯では志波城造営(803年)・斯波郡(紫波郡)建置・徳丹城造営(811年)などの開拓が進んでおり、当社も蝦夷平定の報謝と一帯の鎮護のため、その時期に創建されたと見られている。奥羽の式内社では地主神を包摂しつつ中央神を勧請して創建される例が多いが、当社がその場合に当たるかは明らかでなく、神名「志賀理和氣」の由来も定かではない。大己貴神以下の5柱は後世の合祀ともいわれる。

祭神/経津主神 武甕槌神 大己貴神 少彦名神 保食神 猿田彦神 船霊神

境内社/藤稲荷神社 坂下稲荷社 赤石天満宮 観音社 熊野神社 金比羅神社

岩手県紫波郡紫波町桜町字本町川原1

■八面神社

「八面荒神社 由緒録」によれば、寛治3年八幡太郎陸奥守**源義家**朝臣が仙北金沢の城追討の時、難戦してこの尊神に祈願したところ、その夜神前より白鹿が現れて、鬼切辺の山中に入っていった鹿の跡を追って、数万の軍勢は無事そこを切りぬけることが出来た。

又その後も度々の戦いで難戦のたびに白鹿が現れて大勝利をしたので、義家は自分で神像を彫刻し、八面大荒神として神社の田地とともに寄進されたと記されている。

祭神/天照大神 素戔嗚命 大山祇命 豊受姫命 三吉大神 菅原大神

境内社/八体仏神社 稲荷神社 天満宮

湯沢市駒形町字八面宮ノ前22

●志賀理和氣神社は「浮島明神」と呼ばれていた。きっと中洲の島になっていたのだろう。川底から引き上げたという赤い石も祀られている。元々は出雲族蝦夷の神にまちがいない。アテルイを倒した田村麻呂は出雲族の聖地をつなげて祭祀線を北に伸ばしていったのだろう。八面神社もきっと田村麻呂が作ったのだと思う。それを義家が利用した。ここは八面という集落だから、元々は境内社の八体仏神社が主祭神だったはず。祭祀線も境内社にぶつかっている。

《追記》

●大朝日岳が配志和神社と繋がらないことが、とても気になっていた。そこで、ニアピンしていた鳥海山を頂点とする二等辺三角形をよく検証してみた。そして配志和神社の裏山が気になった。ここは菅原道真が左遷の折に四男の敦茂が移り住み梅を植えた乱梅山「蘭梅山」。通常なら配志和神社にとってのピラミッドになるのだが、元の場所だった奥の院の山はその奥にあるらしく山頂には祠もないらしい。試しに、1200年前の鳥海山の最も高い場所「七高山」に針を置き、蘭梅山の三角点に円周を回してみた。(現在の最も高い新山は1800年頃の噴火でできた)すると…



■大朝日岳山頂 →→ 67.415km →→ 鳥海山七高山←← 67.415km ←← 蘭梅山山頂

●ばっちり大朝日岳の三角点に円周ラインに乗った。ほっとした。この祭祀線こそが一関の始まりの祭祀線といえる。祭祀族の菅原敦茂がやみくもに梅を植えるはずはないからここが隠されたポイントでまちがない。おそらく北条執権時頼の時代に大朝日岳修験は千年封じさせられているから、その時になくされたのだろう。そして三角点三つがピンポイントで存在している不思議。偶然の一致か、蘭梅山のピークを作りかえたのだと思う。なにしろ縄文人は大きな磐座をなんらかの方法で運べたらしいので、小さな山の形を変えることくらいできただろう。それを言ったら、祭祀線そのものも不思議なのだが、神通力か、私たちの知らないテクノロジーを古代から隠し持っている一族がいるのだろう。とりあえず、現場を見てこようと思っている。

《追記》

●秘密のケンミンショーを見ていたら芸人の狩野栄光が出ていて、そういえば忘れていた!と思いたち調べてみた。彼の実家の櫻田山神はたしか 1500 年の歴史を持っている。宮城県の北部にある栗原市なので岩手県南部にある一関市とは近い。もしかしたら繋がっているかもしれない。すると…



■ 達谷窟 金堂 →→ 20.285km →→ 櫻田山神社 ←← 20.285km ←← 配志和神社

■ 達谷窟毘沙門堂 金堂

古くは講堂とも呼ばれ、延暦廿一年（八〇二年）に達谷川対岸の谷地田に建てられたが延徳二年（一四九〇年）の大火で焼失した。本尊は眞鏡山上の神木の松で刻まれた四尺（約一二〇cm）の薬師如來である。
※坂上田村麻呂が建立した達谷窟毘沙門堂の由緒は 3P を参照

■ 櫻田山神社

正式名称は山神社（さんじんじゃ）であるが、地区名の桜田を冠した「櫻田山神社」で一般に呼ばれる。約 1500 年前に創建されたとされ、県内でも有数の歴史を持つ。社格は村社。仙台藩編纂の封内風土記によれば武烈天皇の崩御後の 6 世紀初頭（古墳時代後期）、同天皇の側近であった鹿野掃部之祐が、当地に創建したとされる。当社は、北上川水系江合川上流の二迫川南岸、栗駒山から南東に延びる舌状台地上にあり、「山神社」と呼ばれた。お笑いタレントである狩野英孝の実家としても知られており、彼の持ちネタである「ラーメン、つけメン、僕イケメン」に因み「イケメン神社」とも呼ばれる。2012 年（平成 24 年）9 月 7 日、第 38 代宮司が心筋梗塞によって死去したと報じられた。息子の英孝は 2014 年（平成 26 年）夏に神職の資格を取得し、東京で放送作家として働く弟の孝彦と共に当社を継いだ。

宮城県栗原市栗駒桜田山神下 106

●なんと櫻田山神社の祭神は大山祇神ではなく、悪虐非道の暴君として日本書紀が伝える武烈天皇。そして狩野栄光の先祖はその超悪者の側近だったと。ただ、「日本書紀」の表現は捏造とする考えもある。それは、王朝の終わりに暴君が現れ、これに代わって有徳の王が新王朝を創始する、という儒教の革命思

想によって造作されたものと推定されている。「応神五世孫」という遠い傍系の継体が即位したことを正当化するために、その前の武烈をことさら暴君に描いているのであるのだと。ではなぜ宮城の奥にこの神社を建てたのか。蝦夷討伐のため、あるいは狩野家は逃げて蝦夷の国に亡命したのか。いずれにせよ、坂上田村麻呂にとって暴れん坊な武烈天皇と繋がる祭祀線は、蝦夷討伐には最適といえる。ここにつながるために金堂を 802 年に建てたと考えられる。

《追記》

●秋田の祭祀線を確認していて秋田物部守谷氏の唐松神社が早池峰山と一関の舞草神社に繋がっていることを思い出した。坂上田村麻呂は、饒速日命や武神でもある神功皇后の力も借りたのだろうか…



■天日宮 →→ 101.448km →→ 配志和神社←← 101.448km ←← 岩手山神社奥宮 (山頂)



■唐松神社・天日の宮

古代史の異説を書いた書物として、『物部文書』という文書の一部が昭和 58 年（1983 年）に初公開された。この文書を一子相伝として代々受け継いできたのが唐松神社の宮司家である物部氏であり、この文書は出羽の地に移った物部氏に関する来歴をはじめ、唐松神社創建にまつわる由来が書かれている。

唐松神社にまつわる伝承で最も古い内容は、物部氏の祖神である饒速日命が秋田と山形の県境にある鳥海山に天磐船に乗って降臨、さらにそこから唐松岳（現在の唐松神社の隣接地）の頂上に“日の宮”を建て、持参した“十種の神宝”を収めたというもの。つまり神武東征よりも前の神代の伝説が残されている。

次に登場するのは、神功皇后とその臣である物部膽咋（饒速日命から数えて 9 代目）である。363 年の三韓征伐の凱旋時にこの地に寄った神功皇后は唐松岳の“日の宮”に参詣、さらに膽咋は神功皇后より下賜された腹帯を奉納し、「韓（から）国を服（まつ）ろわせた」という意を含んだ“韓服”神社を建てたとされる。天日の宮は、太古より大和にて物部家の氏神として祀られ、延宝 8 年佐竹義処公唐松神社下宮を現在地に建立せる時、唐松山光雲寺別当社として現在地に祀る。現社殿は大正 3 年に改築、崇敬者の寄進による玉石で築き、社殿は剥面神明造り。社殿後ろに古来よりの抱石三体を奉祀して、多くの崇敬をうけている。

そして宮司家の直接の祖先となる物部那加世が、父の物部守屋が敗死した直後、捕鳥男速に匿われてこの地へやって来たのが用明天皇 2 年（587 年）のことである。当地へたどり着いた時、櫃が動かなくなったため、土地の者から神功皇后の由来を聞いて社殿を修復した。これ以来、物部氏はこのあたりに定住したという（実際には天元 5 年（982 年）に物部氏第 24 代・長文の時に唐松岳に定住し、社殿を建立したことになる）。その後、源義家が前九年の役の際に、唐松神社の神の化身に助けられたため、社殿を再建して神殿を寄進したという記録も残されている。

時代が下り、延宝 8 年（1680 年）に唐松岳の頂上にあつた社殿を現在地に遷したのが、久保田藩 3 代藩主の佐竹義処である。この時、義処は神社の前を下馬しなかったために神罰として落馬した。これに怒った義処は社殿を窪地に当たる土地の底部に建てた（さらに神罰が下って再度落馬するなどしたらしい）。現在でも唐松神社の拝殿は、他の神社とは異なり、一段低い窪地に置かれている。

祭神/軻遇突命（かぐつちのみこと）

息気長足姫命（おきながたらしひめのみこと）

豊宇気姫命（とようけひめのみこと）

高皇魂命（たかみむすびのみこと）

神皇魂命（かみむすびのみこと）

境内にあるのが、他に類を見ない建造物として知られる“天日宮（あめひのみや）”である。周囲に濠を巡らせた中央に直径 20m の石積みがあり、その上に社殿が置かれている。これは唐松神社の宮司家である物部氏の邸内社であり、饒速日命が祀られている。一説では『物部文書』に記された様式の建造物を忠実に再現したものであるとされている。（日本伝承大鑑 HP より抜粋）



祭神/饒速日命、登美夜毘売命、玉鉾神

所在地/秋田県大仙市協和境下台 86

■岩手山神社 奥宮

岩手山には東、北、南の三方に登山道があり、それぞれの登山口には岩手山神社がある。即ち、滝沢村柳沢（柳沢口）、西根町平笠（平笠口、上坊口）、雫石町長山（雫石口）の岩手山神社がそれで、藩政時代には新山堂とよばれ、山頂の奥宮に対する里宮であり、それより神域とされていた。

柳沢口 里宮

延暦 20 年（801 年）**坂上田村麻呂**が蝦夷討伐の際、国土鎮護を祈願して建立し、康平 5 年（1062 年）には源頼義が安倍貞任、貞宗を討つため祈願してようやく勝利できたと言われており歴史ある神社です。明治 2 年、柳沢新山堂は維新の令によって権現号を廃止して岩鷲山大権現は岩手山神社と改称し、本地とする阿弥陀如来・薬師如来・観世音菩薩を廃し御祭神（大穴牟遲命・宇迦之御魂命・倭建命（日本武尊））を祀り、明治 4 年に郷社、大正 5 年 11 月に県社に列しました。8 月第一土曜日に例大祭が行われます。岩手県滝沢市柳沢 305 番地

雫石口 里宮

坂上田村麻呂将軍が、岩手山にこもる賊・赤頭の高丸を討伐のため御陣小屋を設けられたところと伝えられ、南部叢書に大同 2 年（807）田村麻呂創建と記されてある。地方の人たちは、お山の権現様といった。昔から陸奥国総鎮守として旧領主南部公の崇敬が篤かった。

歳代日記に「延宝 2 年（1674）南部重信公、新山堂を再興す」文政 5 年（1822）雫石御中惣勸化にて新山堂再興する。別当は雫石の円蔵院山伏で部下 9 人、藩政時代は絶大の権力者で、慶長 8 年（1603）10 月 20 日、南部利直公より岩手山西口別当を命ぜられ 4 4 石 5 斗 1 升を賜っている。

祭日には円蔵院は藩公名代として行列を揃え、新山堂に参詣したという。お山権現様の遙拝所であった。成人男子は精進潔斎して登山し、女子禁山であった。

祭神/宇迦御魂神 大穴牟遲命 日本武尊

岩手郡雫石町大字長山字頭無野 6 0

平笠口 里宮

創建年代は不詳であるが、岩鷲山末社上岩手新山宮として創祀された本神社は、寛文十年（1670）四月、野火にて焼失。南部信直公寛文十一年（1671）四月、再興す。石高十五石社務錢十二貫文（大蔵院書上）

祭神/日本武命 大己貴命 稲蒼魂命

八幡平市平笠 2 4 - 2 8 5

●岩手には岩手山があることをすっかり忘れていた。山頂の岩手山神社奥宮と、唐松神社ではなく 50m ほど隣にある天日宮に繋がった。滝沢村の柳沢口里宮は、坂上田村麻呂が 801 年に建立している。これ

はアテルイが処刑される 1 年前。雫石口の里宮は 806 年だから、アテルイが死んでからということになる。

そして、天日宮は 3 年前に訪ねたことがあったが、ストーンサークルと浮島を合体させたような素敵なフォルムに惹かれた。社殿裏には丸い石が置いてあって竜神を表していた。

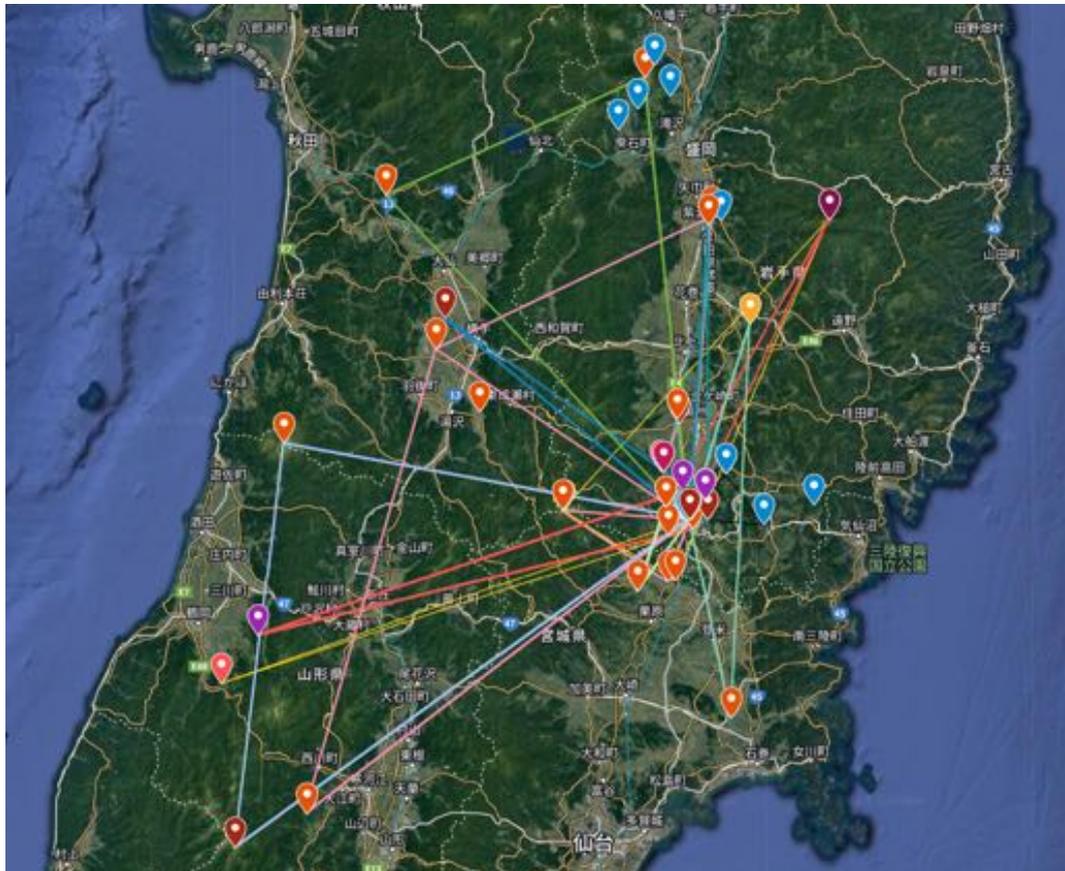
さて、天日宮は 1680 年にこの場所に移された歴史がある。元の唐松神社近くにあったとされる。ということは、唐松山の天日宮跡地は同じ円周上のこの位置（地図↓）にあったのではないだろうか？ピークが二つあるので、それぞれに社殿があったのだと推測される。そして、ここに十種の宝が埋めてあったということ。春になったらもう一度現地を見てこようと思う。



まとめ

●以上、もう切りがないのでこれでひとまず終わりにする。時間のある時に、またじっくり調べて追記していこうと思う。岩手の六芒星を調べるつもりが、すっかり坂上田村麻呂たちに東北の蝦夷（出雲族）がやられてきた祭祀線調べになってしまった。興味深いのは、近隣の神気をすべて配志和神社に集めているということ。配志和神社は、中古（平安時代）に現在地に移動している。まさに田村麻呂の蝦夷討伐の際に移転したとしか考えられない。田村麻呂は出雲族の神を逆にとりこんで、戦のための祭祀線づくりをしていたことがよくわかった。田村麻呂が片腕にしていた祭祀族陰陽師は誰だったのか。配志和神社が蝦夷討伐の中心神社である。ここで田村麻呂の側近陰陽師はアテルイとの勝利のために、その後も蝦夷の残党が反乱を起こさないよう精魂尽くして祈祷していたに違いない。

(2023.11 月記)



《追記》●高速道路をひた走り、配志和神社と蘭梅山を訪ねてみた。



参道入口に日本武尊を祀る白鳥神社。御神木が太くて迫力ある。



社務所前の枯れた大きな池には立派な浮嶋。ここも聖地かも。



446 段の石段を登ると配志和神社。ご神木も迫力。



境内社の天神社。菅公左遷の折、四男敦茂が当地に流され、父の帰洛を願って社殿を修造し観音像を祀り蘭奢梅を植えたという伝承がある。



配志和神社の裏山にあたる蘭梅山の山頂。たしかに祠はなかった。



三角点 誰かが石を足して梅鉢家紋にしたような…



すぐそばにある展望台からは、一関市街を眼下に展望できた。